ホットライン(03)3943・2500
★読者とフライデー編集部を結ぶ窓口です。あなたのとっておきの情報をお待ちしています。また、楽しい写真・面白いユーモア写真の投稿の連絡もお願いします。
メールでも受け付けています。friday@kodansha.co.jp

皇室インサイド

オーストラリアでついに出版

運動会では愛子さまは満面の笑みを見せたが……

衝撃本に書かれた「天皇家のタブーと今後」

▶運動会を見守る皇太子夫妻。ここまで爆笑する皇太子は珍しい

◀直前まで風邪をひいていた愛子さまも、満面の笑みで走り回った

▲『プリンセス・マサコ』の表紙とヒルズ氏。米国でも発売予定だ

PHOTO　JMPA(右上・左)

〈愛子内親王は試験管ベイビー〉

本誌が8月18日号で報じた、皇室本『プリンセス・マサコ』の出版。日本人にとっては衝撃的な〝タブー〟を含む同書が11月1日、ついにオーストラリアで発売される。

同書の著者である豪人ジャーナリスト、ベン・ヒルズ氏は過去に豪紙の東京特派員を務めた日本通。同国の傑出した報道関係者に贈られる「ウォークリー賞」の受賞歴もある第一人者だ。そんな彼が執筆した同書には、一体何が書かれているのか。本誌はヒルズ氏に独占インタビューを行った。

ヒルズ氏は、雅子妃の病因は皇室内で受ける〝異常な圧力〟にあると指摘する。

「結婚当初、皇太子夫妻に子供ができないことを案じた天皇と皇后が毎月、雅子妃に「生理があったか」と聞くなど、皇居の住人は彼女に屈辱的なプレッシャーを与え続けました。雅子妃はそれに抗えずに不妊治療に取り組むことを決めましたが、不妊対策のホルモン治療は肉体的にも精神的にも非常に辛いものです。これが彼女の体調不良の原因の一つになったと、私は考えています」

ヒルズ氏は、愛子さまが体外受精で誕生したことを確信しているという。

「結婚直後に子供ができなかったにもかかわらず、妊娠の可能性が低くなる高齢になってから愛子内親王が誕生したため疑問を持っていました。取材に協力してくれた複数の専門医も同様の意見です。実際、皇太子の精子と雅子妃の卵子を受精させる試みが2～3回行われたという、具体的な情報も得ています」

『プリンセス・マサコ』の中では、雅子妃を守るために真剣に退位を検討する皇太子の姿も描かれている。

「'04年5月の〝人格否定発言〟の直後、皇太子は退位の可能性について雅子妃と話し合いました。しかし、最終的にはそれが不可能だという結論に達したのです。当時は皇室典範改正が議論され、愛子内親王が天皇に即位する可能性がありました。自分たちが退位したら愛子内親王の天皇教育はどうなるのか。愛する娘を手放さなければならないのではないか。皇太子夫妻はそう危惧したのです。また、小和田家は〝皇太子妃の実家〟という立場を非常に誇りに思っています。退位した場合、その原因を作った雅子妃とその実家に非難が集中する。その影響を考えれば、退位などできないというのが夫婦の考えでした」

ヒルズ氏は、インタビューの最後をこう締めくくった。

「宮内庁は雅子妃を海外に出さずに皇居内に〝軟禁〟し、「適応障害」という本来の病名とは異なる発表をしました。そして、皇室はそれを黙認しています。これらの時代錯誤な態度が、海外での日本のイメージを悪くしていることに日本人は気づくべきでしょう。特に、女系天皇や、皇族が外国人と結婚することを認めない制度は、日本人が（女性や外国人に対する）差別主義者であるという認識を強めています。私の著作が、皇室について議論する契機になればいいと思っています」

8月の海外静養から戻った雅子妃は外出の回数も増え、健康を取り戻しつつあるように見える。10月8日には学習院幼稚園で行われた運動会に一家で出席し、笑顔を見せた。

「雅子妃は愛子さまと一緒にお遊戯に参加し、元気に振る舞っていました。周囲の父兄とも自然に会話を交わし、リラックスしていたようです」（全国紙皇室担当記者）

一家の笑顔が今後も続くか。皇室のあり方が問われているのかもしれない。